

「切り株（きりかぶ）」というのは、樹木の根元付近をのこぎりやチェーンソーで人工的に切断した「根側」の部分です。材を建築や薪に使用する場合、強風で倒れる恐れがある場合、建築物や駐車場建設の為など、さまざまな人間側の理由によって生まれます。

樹木は幹から上を失うと、葉からの蒸散がなくなるので、しばらくして根からの水分吸収が途絶え、やがて枯死します。根が残っていても、シラカバやカラマツはほとんどが復活しません。こうした枯死する切株も、コケ、真菌（キノコ）、粘菌（変形菌）などの良い生育場所になります。

しかし、たとえばブナ科の樹木（クリ、クヌギ）は切株の周囲から「ひこばえ（蘖）」が発生し、それで生き延びます。これを「萌芽更新」といいます。時には、切り株上に別の植物の種子が落ちて、育つこともあります。これを「切り株更新」といいます。

北軽井沢の裏庭の「シラキ」の切株に、カエデの芽生えを見つけました。カエデの仲間は「翼果」という竹とんぼのような形の果実で、遠くまで種子を拡散させます。発芽率も良く、林床ではよくカエデ類の芽生えを見かけます。今回見つけたものはまだ「子葉（ふた葉）」がついていたので、今年芽生えたものです。このままどのように育つか、続きを観察したいと思います。

（2025 年 5 月中旬／北軽井沢）

